

Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに伝える気のなかつた私は、「いいえ。」と言ってしまった後で、すぐ自分のうそを快からず感じました。しかたがないから、別段何も頼まれた覚えはないのだから、Kに関する用件ではないのだと言い直しました。奥さんは「そうですね。」と言って、後を待っています。私はどうしても切り出さなければならなくなりました。私は突然「奥さん、お嬢さんを私にください。」と言いました。奥さんは私の予期してかかつたほど驚いた様子も見せませんでした。それでもしばらく返事ができなかつたものと見えて、黙って私の顔を眺めていました。一度言い出した私は、いくら顔を見られても、それに頓着などはしていません。「ください、ぜひください。」と言いました。「私の妻としてぜひください。」と言いました。奥さんは年を取っているだけに、私よりもずつと落ち着いていました。「あげてもいいが、あんまり急じゃありませんか。」と聞くのです。私が「急にもらいたいのだ。」とすぐ答えたら笑い出しました。そうして「よく考えたのですか。」と念を押すのです。私は言い出したのは突然でも、考えたのは突然でないというわけを強い言葉で説明しました。

それからまだ二つ三つの問答がありました。私はそれを忘れてしまいました。男のようにはきはきしたところのある奥さんは、普通の女と違ってこんな場合にはたいへん心持ちよく話のできる人でした。「よござんす、差上げましょう。」と言いました。「差し上げるなんて威張った口の利ける境遇ではありません。どうぞもらつてください。ご存じのとおり父親のない哀れな子です。」と後では向こうから頼みました。

話は簡単でかつ明瞭に片づいてしまいました。最初からしまいに恐らく十五分とはかからなかつたでしょう。奥さんは何の条件も持ち出さなかつたのです。親類に相談する必要もない、後から断ればそれでたくさんだと言いました。本人の意向さえ確かめるに及ばないと明言しました。そんな点になると、学問をした私のほうが、かえって形式に拘泥するくらいに思われたのです。親類はとにかく、当人にはあらかじめ話して承諾を得るのが順序らしいと私が注意したとき、奥さんは「大丈夫です。本人が不承知のところへ、私があの子をやるはずがありませんから。」と言いました。

自分の部屋へ帰つた私は、事のあまりにわけもなく進行したのを考えて、かえって変な気持ちになりました。果たして大丈夫なのだろうかという疑念さえ、どこからか頭の底にはい込んできたくらいです。けれども大体のうえにおいて、私の未来の運命は、これで定められたのだという観念が私の全てを新たにしました。私は昼頃また茶の間へ出かけて行って、奥さんに、今朝の話をお嬢さんにいつ通じてくれるつもりかと尋ねました。奥さんは、自分さえ承知していれば、いつ話してもかまわなからうというようなことを言うのです。こうなると何だか私よりも相手のほうが男みたやうなので、私はそれぎり引き込もうとしました。すると奥さんが私を引き止めて、もし早いほうが希望ならば、今日でもいい、稽古から帰ってきたら、すぐ話そうと言うのです。私はそうしてもらおうほうが都合がいいと答えてまた自分の部屋に帰りました。しかし黙って自分の机の前に座って、二人のこそこそ話を遠くから聞いている私を想像してみると、何だか落ち着いていられないような気もするのです。私はとうとう帽子をかぶって表へ出ました。そうしてまた坂の下でお嬢さんに行き合いました。何にも知らないお嬢さんは私を見て驚いたらしかつたのです。私が帽子をとって「今お帰り。」と尋ねると、向こうではもう病氣は治つたのかと不思議そうに聞くのです。私は「ええ治りました、治りました。」と答えて、ずんずん水道橋のほうへ曲がってしまいました。